

〔研究論文〕

意思決定に導く学級活動(3)の授業づくり
—「見付ける」・「決める」段階の工夫を通して—

The lesson planning of class activity(3) leading to decision making
- Devising the stages of “find” and “decide”-

近 藤 彰 信
Akinobu KONDO

脇 田 哲 郎
Tetsuro WAKITA

福岡教育大学教育学研究科
教職実践専攻教育実践力開発コース

福岡教育大学
教育実践講座

(2019年1月31日受理)

本研究は、北九州市立A中学校の第2学年の子ども達を対象に、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別活動編に示されたキャリア教育の「要」としての学級活動(3)において、子ども達ひとりひとりが個性豊かな“意思決定”を行えるように、「見付ける」・「決める」段階の工夫を行い、子ども達を意思決定に導くガイダンス授業として、その工夫が効果的であるか検証したものである。また、加えて新見(2008)が作成した中学生版キャリア意識尺度調査の意思決定項目を授業の事前、事後に行い、子ども達のキャリア意識の変容を調査して、分析を行った。

本研究によって、シンキングツールを「見付ける」段階で取り入れることによって、自己と他者の現在の意見や考えが可視化されることで、子ども達は「決める」段階、即ち意思決定に結びつけやすいということが分かった。

キーワード：意思決定、学級活動(3)、「見付ける」段階、シンキングツール、可視化

1 はじめに

平成29年告示学習指導要領(以下、学習指導要領と呼ぶ)の総説では学校教育、即ち学校現場において子供たちを育む教師について、「子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと」が改めて求められている。なかでも、特別活動においては、他者と協働して課題を解決していく能力は、これまでの学級活動(1)(以下、学活(1)と呼ぶ)の集団の問題解決に限らず、子供たち一人一人のキャリアに関する課題解決能力、キャリア形成能力を他者との話し合い活動によって深化させることが求められている。また、平成24年に国立教育政策研究

所が実施した「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」の一次報告書では、この調査に参加した保護者の約5割が「学ぶことや働くことの意義を考えさせる学習」、約3割が「将来の生き方や人生設計に関する学習」等のキャリア教育を学校教育に求めていることが明らかとなっている。しかし、調査に参加した学級担任の約4割が「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」、約3割が「キャリア教育に関する指導の内容・方法をどのようにしたらよいかわからない」と回答しており、加えて、これまでのキャリア教育は進学指導一辺倒であったという学校も少なくなく、一次報告書においてキャリア教育の指導方法、指導内容の充実、系統的な学習過程の実施を図ることが求められ、学校教育でのキャリア教育に社会の大きな期待と関心が集まった。小泉他(2016)は、著書のなかでキャリア教育の意義につ

いて「教育基本法を参照するまでもなく、教育には、個人の人格を発達させることと、望ましい社会の構成員を育成することが期待されています。キャリア教育は、この教育にかけられる2つの期待との対応において大きな意義をもちます。」と述べており、教育の目的である人格の完成とキャリア教育は密接なものと考えることができる。加えて、「キャリア教育を進めるうえで、個人のためと、社会のためという2側面を考慮に入れることは非常に重要なポイントになります。」と述べ、子供たちにキャリア意識を身につけさせるうえで、公共の福祉をはじめ、マナーやモラルに關した学びも求められていることを指摘している。

このような背景があり、学習指導要領特別活動編では学級活動(3) (以下、学活(3)と呼ぶ)が創設され、キャリア教育の「要」として位置付けられた。「要」という表現は、これまで学校教育の全体で行う道徳教育において使われてきた用語であり、道徳の時間に学んできたことを“補い、深め、まとめる”という意味を持つ。キャリア教育をこの考えに基づき当てはめると「学校教育全体で行っていくキャリア教育を、学活(3)において、補い、深め、まとめる」と推論できる。

これまでのキャリア教育は、進学指導を重点として、職業体験など行事やイベントごとに行われることが多く、それらは単発のものとなっていた。それにより、子供たちの思考は途切れ途切れになってしまい、継続的なキャリア教育が実現されずキャリア形成にまで発展しているとは言い難い現状がある。これからのキャリア教育には、これまでの進学指導をはじめ職業体験などの点と点を結ぶ系統的かつ継続的な学びが求められており、その中心となるものが学活(3)の学びの大黒柱と言える意思決定及びキャリア形成能力である。

特に、極めて重要なものが“意思決定”及び“意思決定内容の実践”である。学校教育、教師には子供たちの未来を描く力であるキャリア形成能力を養っていくことが学習指導要領で明記されていることは上記の通りである。そのキャリア形成能力を育む土台が“意思決定”及び意思決定内容の実践と言える。今後、子供たちのキャリア教育を進めるうえで、まずは意思決定及び意思決定内容の実践を子供たちに促す必要がある。

2 研究の目的

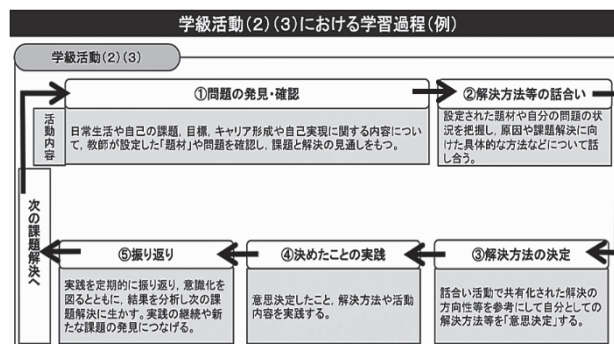
本研究は、キャリア教育の継続性を図ること、キャリア形成能力を育むために、その土台である意思

決定及び意思決定内容の実践に子供たちを導く学活(3)の授業づくり(「見付ける」・「決める」段階)の工夫が効果的であるか検証することを目的としている。

3 研究の方法

授業づくりにおいては、学習指導要領に示された図1「学活(2)(3)における学習過程(例)」及び小学校特別活動指導資料(国立教育政策研究所, 2014)の図2「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」学習過程、学活(3)プランニングシート(脇田, 2018)を参考に工夫を凝らし実践する。

図1 「学活(2)(3)における学習過程(例)」



加えて、他者との話し合い活動が活発になるようにシンキングツール等を活用する。これらの教師の工夫が子供たちを意思決定に導いているか否か実践授業を行い、授業内での子供たちの会話やワークシートの記述、事後の聞き取り調査等から分析する。実践授業の事前と事後に新見(2008)が作成した中学生版キャリア意識尺度調査を実施して、子供たちの意識の変容を探る。ここからは、実践授業が子供たちのキャリア意識にどのような影響を与えているか、子供たちの姿や記述から分析を行う。実践授業は2回実施した。

研究計画及び実施内容は表1の通りである。

表1 研究計画及び実施内容

年月	実施内容及び計画
H30 4-5月	研究構想・初期キャリア意識調査
" 6月	授業構想・教材研究
" 7-8月	実践授業Ⅰ・授業分析
" 10-11月	事前キャリア意識調査 課題アンケート調査
" 12月	実践授業Ⅱ・授業分析
H31 1月	事後キャリア意識調査

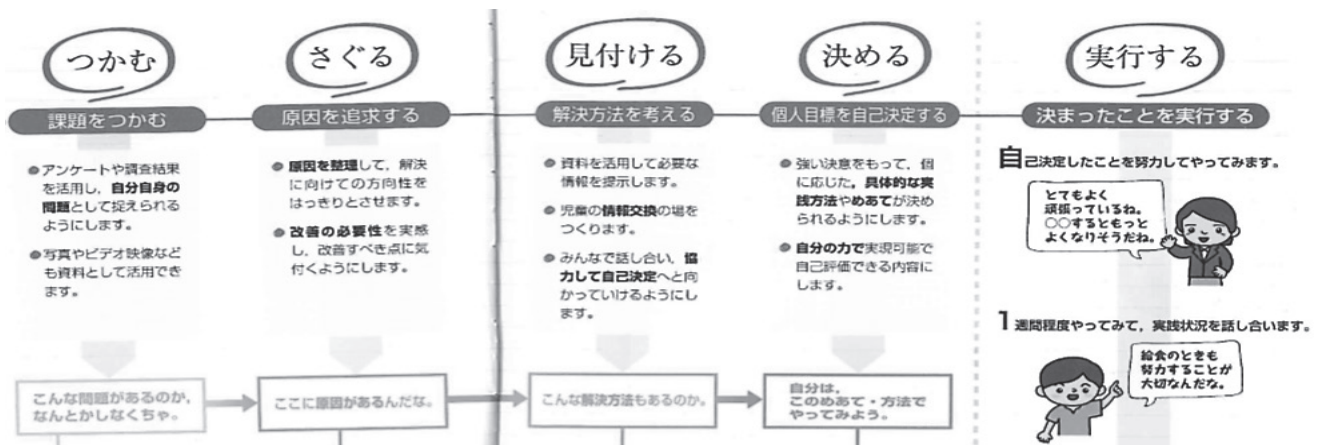


図2 小学校特別活動指導資料 学習過程

なお、本研究に関わる全ての実践授業及びアンケート調査等は、下記の学校、学年において実施・検証した。

○実践授業協力校の概要

実践授業協力校：北九州市立A中学校

実践授業対象者：第2学年全学級(143名)

実践授業協力者：第2学年所属教員

実施期間：平成30年4月18日～翌年1月31日

4 第1回 実践授業

(1) 子供たちの実態

本研究協力校の第2学年の子供たちは、比較的落ち着いて教科学習や学校行事等に参加する子が多い。また、研究協力校が毎年子供たちに実施している学校満足度アンケート(仮名)では、「現在の学校生活に満足している」と答えている子供は70%以上であり、子供間、子供教師間の人間関係も良好な学校、学年である。

しかし、筆者が子供たちと会話するなかで、将来の夢や希望、中学生段階では直近の課題である進路(高校進学等)に前向き、もしくは見据えている子供が少ないことが明らかとなった。加えて、子供たちとの会話から、物事の計画や期限を決めて実践することが苦手な子が多いという現状も把握ができた。

以上のことから、研究協力校の第2学年の子供たちの多くにキャリア形成能力、意思決定能力の弱さ、苦手意識があると推察する。先に述べた通り、学習指導要領ではキャリア形成能力を育み、豊かな人生を歩むことのできるよう指導することが明記されており、研究協力校において学活

(3)の授業を通して、キャリア形成能力の大切さ、特に人生における意思決定の重要性を伝えることは意義深いと考えた。

(2) 実践授業を通して目指す子供像

第1回実践授業では、学活(3)のキャリア教育の大黒柱である“意思決定”の重要性を理解し、自身の生活や学習の課題について考え、他者との話し合い活動をふまえ、よりよく生きるための課題解決策を見出し、自身にあった学びのプランを計画、実践できることを目標とした。

(3) 実践授業の概要

学活(3)キャリア教育は、子供たちの自己実現を達成するために必要な能力を養うものである。なかでも、本研究において非常に重要なポイントとなるものは“意思決定”である。自己実現を達成するためには自身の意思で物事や事象を判断して実践する態度と考え方が求められる。では、そもそも意思決定とは何なのか。Gilboa(2015)は著書のなかで、意思決定とは複数の方法や答えのなかから自身が、自身に見合ったものを判断して決める認知的活動だと定義している。ここでおさえておくべきは、複数の方法や答えが存在していないと意思決定とは言えない点である。加えてGilboa(2015)は、意思決定が真に良い判断だったかは意思決定者自身がその行為と実践を振り返り評価するものと述べている。

第1回実践授業は、夏休み前であったため、自らの志望する進路(以下、自己実現と呼ぶ)に向かって有意義な時間を過ごすための学習計画づくりを題材として行った。事前に子供たちには、夏休みの学習計画を立てさせ、授業時に持参させた。

それらの学習計画を基に、中学校2年生段階の夏休みに出来得る学習内容や方法を出し合い、その中から、自身に見合った意思決定をさせる。特に、学級全体での課題原因の探求、解決策等の話し合い時間を十分に確保し、子供間の対話型授業を意識することで、より複数の解決策を見出せると考えた。これにより、Gilboaが指摘した複数の方法や答えが生まれ、子供たち一人一人に見合った意思決定(課題解決の選択)が行えるものと推測した。なお、本実践授業は学活(3)のガイダンス授業として行うことから、教師が進行・ファシリテーターを務める。ガイダンス授業は、学習指導要領に示された「ガイダンスとカウンセリングの趣旨を踏まえた指導を図る」項目に明記された、共通の課題を全体に向けて指導する在り方である。学活におけるガイダンス授業において、学習指導要領では、「学級や学校の生活への適応とその充実・向上を図る活動である。」とされ、認め合い、励まし合う集団の中で、集団、個人の積極的に活動する意欲や態度を養うものであり、同質的な指導を行うものとされている。ガイダンスに加えて、教師は子供たち一人一人の学びが円滑になるよう必要な手だてを講じることも明記されており、これをカウンセリングと言う。カウンセリングは、子供たち一人一人ニーズの違う課題等を解決するに当たり、教師がカウンセラーとなり面談することを指す。

本実践授業においては、授業では意思決定の重要性、実践を促し、授業後一定の期間を空けて子供数人をランダムに抽出し、実践度合い及び意思決定内容の妥当性をカウンセリングから見とる。本実践授業においてカウンセリングは、Gilboaの指摘している行為と実践の振り返りにあたる。これら実践授業時の子供たちのワークシートの記述、振り返り、抽出型カウンセリングのTC記録等から第1回実践授業の成果と課題を洗い出す。

第1回実践授業に関する内容は以下の通りである。

実践授業日：平成30年7月10日

実践授業対象：第2学年(全4学級：143名)

※全学級実践群

授業形態：ガイダンス授業(話し合い活動)

授業題材：夏休みを有意義に

～これからの進路選択に生かす学習
プランづくり～

本実践授業の指導過程は表2の通りである。

表2 第1回実践授業 指導過程

学 習 活 動	
事前の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・兄弟・姉妹や先輩たちは進学という目標に向かってどのような努力をしたか探る。 ・「夏休みの学びの計画」を立てる。 → 自分のできる範囲内で学びの計画を立てる
本時の活動	<p>＜つかむ＞ アンケート集約結果から、自身達が明確な進路設計がないことを知る。</p> <p>＜さぐる＞ 前半：なぜ「学びの計画」作成が困難なのか？ 後半：現役高校生の声を紹介する。</p> <p>＜見付ける＞ 全体で「これから何ができるか」考え、夏休みの学習プランについて話し合う。</p> <p>＜決める＞ 他者の意見を取り入れながら、自身が作成した「夏休みの学びの計画」を検討、修正する。</p>
事後の活動	<p>本時で決めた「夏休みの学びの計画」が実際にできそうか授業者もしくは、担任の先生と話し合い、必要があれば修正して、実践する。</p>

(4) 実践授業の流れと工夫

本実践授業では、小学校特別活動指導資料(国立教育政策研究所, 2014)「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」学習過程を引用して学習過程を構成した。本実践授業を行うまで、中学校で子供たちは学活、所謂話し合い活動をあまり経験しておらず、授業の流れや話し合いの方法を把握できていない現状があったため、小学生段階で経験済みの学習過程を用いた工夫を行った。

先に実施した題材アンケートの結果、進路に関した事柄が多く挙がった。よって、子供たちには事前課題として、中学校2年生の現在、夏休みを有意義に過ごすための学習計画表を作成させ、保護者や兄弟、姉妹、先輩等にこの時期に行っておけば良かった取組みを調べさせた。自身一人では閃かないアイディアや学習方法を見聞きすることで刺激となり、加えて話し合い段階での活性化になると想定した。これらを基に、本実践授業は作成してきた学習計画の内容を学級全体で協議し、自身に見合った実践できる範囲での学習計画を意思決定する流れとした。

(5) 実践授業の内容と考察

導入段階(以降、つかむ段階と呼ぶ)では、進路に関する事前アンケートの結果を提示し、学級全体の課題として高校進学への不安があること、計画的に学習を行いたい実践できていないことを確認した。子供たちのなかには、「全員、思っと

ることと同じやん」「進学したいけど、今何をすればいいか分からん」といった声が聞こえた。事前アンケートの結果を提示したことで、「私だけかも」という不安が「みんなも不安なんだ」という安堵や安心感になったと見受けられた。ここからアンケート結果を提示し、学級全体で共通の問題が存在することを確認することで、共感的人間関係がうまれるのではないかと考えた。今回の場合は、その共感が先の述べた子供たちの声だと考える。このように、つかむ段階では、子供たちの課題への意識と共感的人間関係を高める構成をすることで、解決策を話し合い、見付ける必然性を実感できるのではないかと考えた。

次に、展開Ⅰ段階(以降、さぐる段階と呼ぶ)では、つかむ段階で把握した「計画的に学習や生活ができない」理由を学級全体で話し合い明らかにしようとした。この際、教師(筆者)はファシリテーターを務め、一人一人が思い考える素直な意見を引き出すことに努めた。しかし、つかむ段階で意識が向上していた子供たちだったが、なかなか意見を言う者が現れずに、教師の指名による発言が大勢を占めた。この原因に関しては、下記の(7)第1回実践授業の成果と課題で述べる。教師の指名により「部活が忙しい」「用事などが急に入り計画通りに過ごせない」「必要に迫られたらする」「やりたい時にガッツリする」などの意見が挙げられ、中学生の子供たちの現実的な問題点が浮かび上がった。さぐる段階では、このようになぜ課題がうまれるかの原因や背景を子供たちの言葉で引き出すことが肝要である。なぜならば、この原因や背景の解決策を見出すのが、次の展開Ⅱ段階(以降、見付ける段階と呼ぶ)となるからである。課題の原因や背景が多いほど、見付ける段階は活発になり、子供たちから多くのアイデアが挙げられる。加えて、子供たちの先輩である現役高校生を対象に実施した「中学2年生時の進路学習アンケート」結果の抜粋を提示して、同じような状況であったことに気付かせた。同時に、「ああしておけば良かった」や「あれをやっておけば」といった反省や後悔も紹介し、計画的な学習の必要性を意識させた。

そして、見付ける段階では、現段階で自分達に出来る範囲での学習内容を学級全体で話し合い見付けさせようと試みた。まずは、考える時間を確保して机間巡視を行い、作成してきた学習計画表やワークシート等を見ると意見がしっかりと書かれている子が多く居た。しかし、残念ながら見付ける段階もさぐる段階同様に、学級全体での話し合い

では自発的に意見を言う子供がおらず教師の指名での発言が多くなってしまった。これにおいても、さぐる段階同様、(7)第1回実践授業の成果と課題で述べることとする。計画的に学習できない現状の解決策を見出すなかで子供Aから「急な予定が入っても出来る学習計画にすれば良い」という意見が挙がった。この発言こそ、筆者がねらった「自身に見合った、実践できる範囲での学習計画」をつくるための重要な部分であり、数人がこの意見に共感していたことから、本実践授業を行った意義が少なからず見出せた。その他、挙がった意見としては、「毎日継続することが大切なので、1日30分の学習を取り入れる」「読書を欠かさずに行う」「苦手な教科を、時間を決めて行う」等、短い学習時間を毎日コツコツと積み重ねていく方法が多く挙がった。また、「自分自身の心身の体調管理を十分に行う」といった意見も挙がるなど、ワークライフバランスについて考えることの出来る子供もいた。

終末段階(以降、決める段階と呼ぶ)では、事前作成してきた学習計画を再度確認させ、実際にその通りに実践できるのか、内容量は適当か判断のもと、これまでの話し合いから導き出された解決方法や実践内容のなかから、自身が実践出来る内容・負荷を意思決定させ修正を行わせた。多くの子供たちが、事前に作成してきた学習計画からの修正を行った。その結果、子供たちは自身が作成してきた学習計画は、理想を書き出していただけで、実践を行えるかどうかまでは考慮していなかったという意見がワークシートから見受けられた。下記に示す図3修正途中の学習計画は、子供が事前に作成してきた学習計画を、決める段階で修正しているものの一例である。

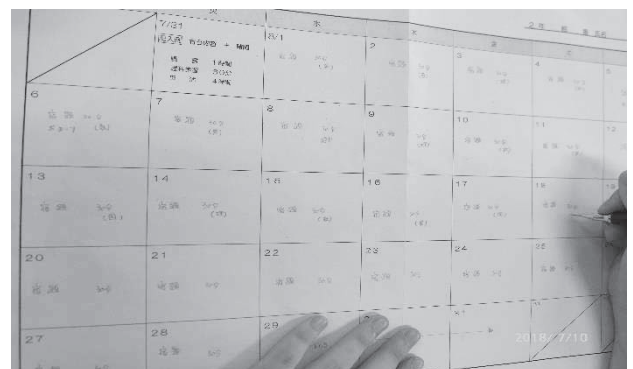


図3 修正途中の学習計画

この修正途中の図から分かるように、子供たちの学習計画は確実に実践できる事柄を記入するよ

うになった。多くの子どもが当初は、理想的ではあるが実践困難であろう学習計画を立てたが、現役高校生の声や見付ける段階での話合いから、短時間でかつ、継続の出来得る計画へと変化していった。このように、実践の継続を視野に入れた意思決定を子供たちが出来たことは、意思決定の重要性が少なからず本実践授業を受けて伝わったと考える。なお、意思決定能力の変容に関しては、次々章の総合考察において述べるものとする。

(6) 抽出型カウンセリングからの考察

実践授業で意思決定した内容を子供たちが実践できているか確認、付加修正を行うために、夏休み登校日の際に、ランダムで子供を抽出して、カウンセリングを実施した。子供たちに対して、①(意思決定した)学習計画は実践できているか、②付加修正を行ったほうが良いか、③自身が意思決定したことへの自覚、責任についての3点を尋ねた。下記に、その際のTC記録の一部である表3カウンセリングTC記録(抜粋)¹を提示する。

表3 カウンセリングTC記録(抜粋)

T: 以前に授業で決めた夏休みの学習計画は、順調に実践できてますか。どう？
C: んー、私は計画した勉強時間よりも多めにできてます。あと読書もたまにですけどしてます。
T: おー、計画よりも上をいったんやね。今の学習計画は、〇〇さんにはもの足りない感じか？
C: んー、何て言うか、足りないとかじゃなくて、計画は最低限で決めたから、もっとできるなあって時は時間を延ばしたり、読書したりしてます。うん。
T: なるほどね。じゃあ、このまま継続して実践していこうか。あつ、今回さあ自分で学習計画を立てただけど、何か自覚とか責任ってものを感じることはある？
C: 自覚とか責任は知らんけど、先生とか人から「やれ」っち言われたものじゃないから、自分で決めたことだから(実践)できてるかな。

カウンセリングTC記録(抜粋)から見とれるように、カウンセリングを実施した子供たちのなかに、自分で決めたことを貫徹しようとする姿があった。この態度や考え方こそ、意思決定した自身への責任ではないかと筆者は考える。ただし、子供たちがこのことを自覚しているとは言い切れないため、今後の課題と言える。また、今回のカウンセリングにおいては、付加修正を行っていないが、子供によっては、適切な実践量でないことが

ある。その際には、カウンセラー役の教師が付加修正の助言を行うことが良いと考えている。そして、子供と一緒に意思決定内容を修正することが必要であると明らかになった。このようにカウンセリングを行うことで、子供たちの課題への意識を持続させ、実践を促すことができると考えた。

(7) 第1回実践授業の成果と課題

本実践授業の一成果としては、子ども達が自身に見合った学びの計画を作成できたこと、意思決定の大切さに気付きだしたことが挙げられる。ワークシートの振り返りやカウンセリングから「先生から言われてやる勉強よりも、自分で決めた勉強のほうができる(実践できる)ように思う」「計画を立てて、それで終わりじゃダメということを経験した」といったニュアンスの記述や言葉が多く見受けられた。

一方で課題が多く浮かび上がった実践授業でもあった。まず、先に述べた子供たちの自主的な発言が少なかった課題である。思春期の中学生共通の実態として大勢の前で発言することを躊躇する傾向にあるにも関わらず、全体での話し合い活動を行ったために発言等が極めて少ない授業であった。このような実態があり、実践授業協力校では、これまで学級全体での話し合い(言語活動)よりも、小集団での話し合いを主として行っていた。しかし、筆者(授業者)の実態把握不足であったために、全体での話し合いを仕組んだ。このことについて、授業後の授業評価アンケートで子供たちの多くから「全体での話し合いよりも、いつもの班での話し合いが良かった」「いきなり、みんなの前で話すのはキツイ」といった声が届いた。次いで、授業参観者や助言指導者より、「子供たちの課題意識を高めようとする姿勢は伝わってきたが、それだけ(「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」学習過程)で意思決定を促せているのか。また、小学校の学習過程そのままでは、中学生段階に見合った学習展開とは言い難く、更なる教師の意思決定を促す工夫が必要ではないか」という指摘を受けた。

以上の課題を踏まえ、第2回実践授業では、中学生段階に見合った話し合い段階(小集団→全体)の導入、話し合いを活発化させるために、自己及び他者の意見を可視化できるシンキングツールを、学活(2)(3)における学習過程(例)②課題解決方法等の話し合い、小学校特別活動指導資料(国立教育政

¹ 子供の子承の基、ボイスレコーダーにて記録。

策研究所, 2014) で言われる「見付ける」段階で活用する。これらの段階で話し合いが活発に行われ、解決方法がより多く提案されることで、決める段階での意思決定の幅が広がり、子供たち一人一人に見合った意思決定を促せるものと考えた。

4 第2回 実践授業

(1) 実践授業の概要

中学校2年生の学習過程も折り返し地点を過ぎ、学年全体として進路への意識が徐々に高まってきた。背景として、3年生の高校入試への学習が本格化してきたこと、3学期には、中学校2年生を対象とした一部の私立高校説明会が開催される等、差し迫った緊張感があると推測される。

第2回実践授業では、前回の実践授業での課題であった中学生段階に見合った話し合いを実現すべく、見付ける段階の話し合いを班→全体に行う。話し合いの段階設定の有効性、加えて、シンキングツールの活用が子供たちの話し合いを活発化するものであったか、事後アンケートから検証する。本実践授業は、やってはいけない高校選択の方法、現在(中学校2年生段階)の高校選択の基準を決めさせ、3学期の私立高校説明会につなげることをねらいとした。なお、2回の筆者が行った実践授業が子供たちのキャリア意識、なかでも意思決定に良い変容をもたらしているか分析するために、今回は、1組・4組を実践群として筆者が授業を行い、2組・3組は協力群として、当日授業を行わず²、翌日、新見(2008)が作成した中学生版キャリア意識尺度調査を実施した。これらの分析等の結果は、次章の総合考察において行うものとする。

第2回実践授業に関する内容は以下の通りである。

実践授業日：平成30年12月6日

実践授業対象：第2学年(全2学級：73名)

1組・4組実践群 当日実施

※2組・3組協力群 後日実施

授業形態：ガイダンス授業(話し合い活動)

授業題材：高校選択の基準を考えよう

～自分の強みを活かした高校進学を実現するために～

本実践授業の指導過程は表2の通りである。

表4 第2回実践授業 指導過程

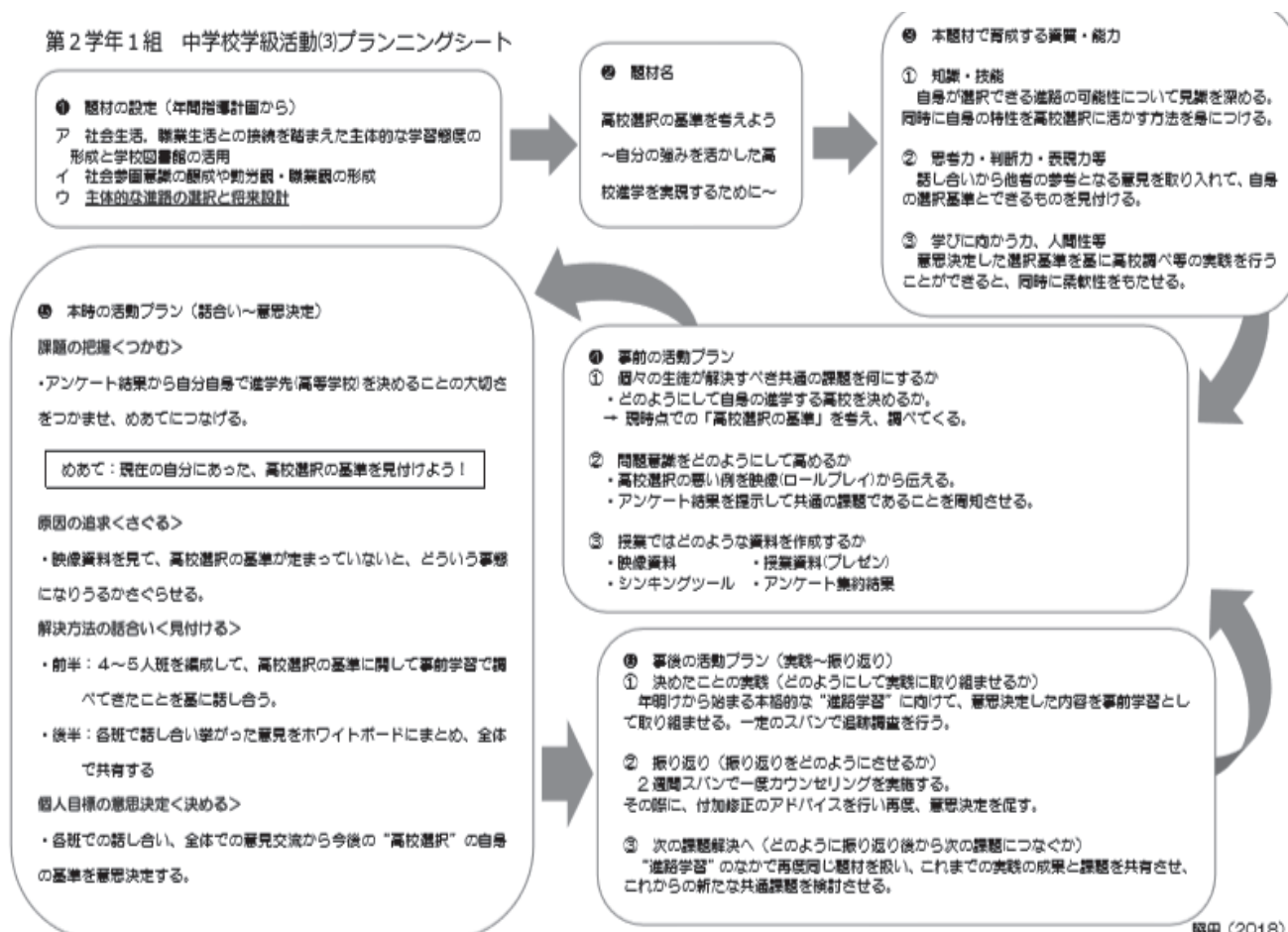
学 習 活 動	
事前の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・どのように自身の進学する高校を決めるか。→現時点での自身の「高校選択の基準」を考え、また、保護者や先輩、知り合いから選択基準となりうる考えを調べてくる。
本時の活動	<p><つかむ> アンケート結果から自分自身で進学先(高等学校)を決めることの大切さをつかませる。</p> <p><さぐる> 映像資料を見て、高校選択の基準が定まっていなないと、どういう事態になるかさぐらせる。</p> <p><見付ける> <ul style="list-style-type: none"> ・前半：班で、高校選択の基準に関して事前学習で調べてきたことを基に話し合う。その際、シンキングツールを活用する。 ・後半：各班で話し合い拳がった意見を基に、全体での交流、話し合いを行う </p> <p><決める> 各班での話し合い、全体での意見交流から今後の「高校選択」の自身の一基準を意思決定する。</p>
事後の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・意思決定した選択基準を基に、学校説明会及び見合った学校調べを実践する。 ・実践後に、必要があれば選択基準の修正を行う。

(2) 実践授業の流れと工夫

本実践授業の流れとしては、第1回実践授業と同様に、小学校特別活動指導資料(国立教育政策研究所, 2014)の「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」学習過程を採用した。子供たちも筆者の前回の授業を経験していることから、同様の学習過程をベースとして行うことで、授業全体の見通しを持てるものと考えた。また、授業マネジメントを行うため学活(3)プランニングシート(脇田, 2018)を用いた。これにより、筆者自身が、授業を通して育成する資質・能力及び子供たちが実践していくサイクルを明確に見通すことができると考えた。プランニングシートは下記、表5で示す通りである。本実践授業では、中学生段階に見合った話し合い段階の工夫として、先に述べた通り、見付ける段階で班→全体と交流・話し合いを行う。これは、日頃の学校生活で子供たちが多く経験している話し合い及び交流スタイルであり、第1回実践授業後のアンケートから、このスタイルを取り入れてほしいという要望があり取り入れた。慣れた学習スタイルを取り入れることで、他者との話しやすさ、交流の活発化が期待できると考えた。また、班での話し合いにシンキングツールを用いることで、話し合いの視点、材料になり、意見の可視化につながるものと考えた。シン

² 後日、実践群と同様の授業を実施。

表 5 学活(3)プランニングシート



脇田(2018)

キングツールは堀・加藤(2011)が考案した2×2マトリクス(以下、マトリクスと呼ぶ)を参考に筆者が作成した。見付ける段階(特に赤枠で囲んだ部分)を、子供たちの声で充実させることで、より複数の解決方法や対処法が生まれ、決める段階では個性豊かなバリエーションに富んだ意思決定が促せると推測した。

(3) 実践授業の内容と考察

事前に題材アンケートを実施していたことから、授業全体として子供たちの課題への意識は非常に高かったように感じられた。授業開始前の環境整備の際に、子供たちの事前課題を若干見て回ったが、第1回実践授業時よりも充実したものを持参していた。ここから、題材を通して学ぶことの必然性が子供たちの課題解決意欲の向上につながっていると改めて考えた。

つかむ段階では、事前に実施した進路アンケートの結果を提示し、高校進学の前段に高校選択の基準が必要であることを確認させた。図4はアンケート結果の提示を行い、課題の把握を行う授業風景の一例である。

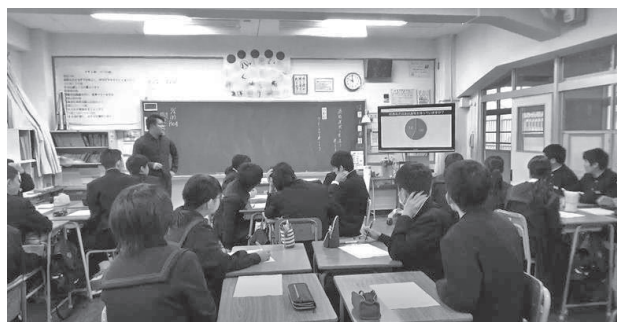


図4 つかむ段階の授業風景

題材への意識が高いことから、ほとんどの子供たちがアンケート結果を示すディスプレイを、顔上げて見ている。第1回実践授業では、少なくとも3割ほどの子ども達がアンケート結果に興味を示さなかった。しかし、今回は子供たちの声から題材選択を行ったことにより、意欲的に学習に入れたと考える。第1回実践授業の考察の際にも述べたが、アンケート結果に共感する子供も多数存在した。筆者の感覚では、今回のほうがより大きな共感があったと感じた。

さぐる段階では、前段階で確認した“高校選択

の基準”がなぜ必要であるか、筆者の自作映像資料から全体で考えさせた。映像資料の内容としては、①高校進学の意味はあるが、高校選択の教育相談まで何も考えていなかったパターン、②他者(保護者や教師)の意見を鵜呑みにして決めたパターン、③自分の強い思いだけ(校風等は考慮せず)で決めたパターンの3点である。この映像資料からは、子供たちに高校選択の基準を定めたうえで、進学先を決定しなければ、進学後に後悔や、最悪の場合、転校や退学も起こりうることを伝える目的があった。幸い子ども達の多くが、ワークシートの記述欄に、「最終的には自分が決める。だけど、他者の意見を聞くことも大切」、「先輩が先生や親と高校を決めるのめんどいと言ってたけど、動画から話し合っただけの方がいいと思った」等と記述しており、さぐる段階の目的は達成されたと考える。図5は、映像資料を視聴する子供たちの姿である。

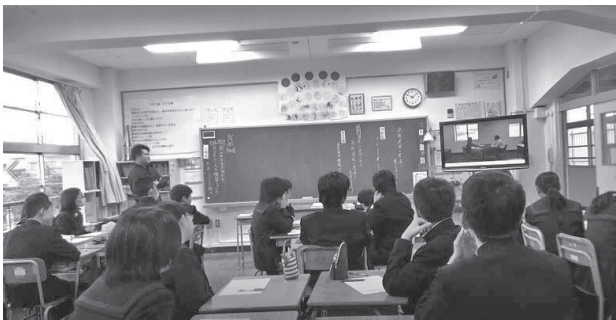


図5 さぐる段階の授業風景

映像資料には、筆者や子供たちと比較的に年齢層の近い学生を起用し、真剣な選択場面や面白おかしくする部分等を織り交ぜて作成したことで、子供たちは楽しく学ぶことができたのではないかと考える。図5では、後ろ姿しか見とれないであろうが、筆者(授業者)からは、いつも以上に微笑み、笑顔で映像資料を視聴する子供たちの顔を見とることができた。

見付ける段階においては、これまでの学習過程から学び、気付いた“高校選択の基準”にはどのようなものがあるのか、自身が現在考えている案、他者(保護者、先輩、教師)から見聞きした案等を持ちより、班での話し合いを行わせた。その後、シンキングツールを配付し、意見の共有・可視化を図った。この際、2色(青色、黄色)の付箋紙を配付し、青色の付箋紙には“自己の高校選択の基準案”を、黄色の付箋紙には“他者の高校選択の基準案”を記述させた。このような手だてを行った理由として、話すことが苦手な子供も班活

動への参加が可能となり、意見の共有が行えること、シンキングツール(マトリクス)を活用する際に、その付箋紙を再活用できるからである。下記に示す図6が配布したシンキングツールである。

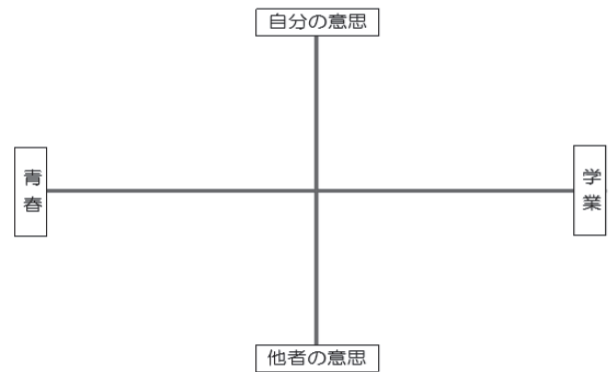


図6 シンキングツール(マトリクス)

シンキングツール(マトリクス)の縦軸には、自分の意思及び他者の意思を位置付け、横軸には、学業及び青春を位置付けた。これらの詳細は、下記の図7に示す。

自分の意思・・・自分が望む選択基準

他者の意思・・・他者(保護者など)が望む選択基準

青春・・・部活動やボランティアなどが中心

学業・・・得意教科や進学率などが中心

図7 軸の詳細

子供たちは、見付ける段階において、はじめに事前課題で調べてきた高校選択の基準を、付箋紙に記入し、その後にシンキングツールに分類する作業を行った。記入した内容の紹介・共有をはじめ、分類時には多くの対話が班内で行われ、時には、班を越えて交流する姿も見受けられた。筆者として、特に嬉しく感じたことは、ある班の子供が高校選択の基準案を提示した際に、班員から「それ、重要よね」、「俺には考えつかんやったわ」等の肯定的かつ建設的な交流が行われていたことである。子供たちが要望した通り、班での話し合いは第1回実践授業とは比べものにならないほど活発であり、その質も高かった。下記の図8、図9では、その際の、班での話し合い段階の授業風景の一部を提示する。



図 8 班での話し合い風景①



図 9 班での話し合い風景②

一般的な話し合いを行うよりも、子供たちは伸びやかに意見の交流を行っているように見受けられた。授業の最中、子供 B が「この表(マトリクス)があると、みんなと話しやすい」という意見を筆者に届けてくれた。その他にも、班内での交流を通して「あいつが「それ、ここやないん？」って言ったのがびっくりした。あんな、しゃべらんけ、俺、話づらかったんよね。でも今日、結構あいつとしゃべったんよね」等、日頃、対話が少ない子供間での交流も行われていた。本段階でのねらい以上の、気づきや学びを子供たちは見出したと考える。

次に、前段の班での話し合いを基に、学級全体で交流を行った。時間の関係上ここでは、班での話し合いで挙げた高校選択の基準案のなかで、独自性の強いもの、面白いもの、共感が多かったものを挙げさせた。子供たちは班での話し合いを基に全体交流を行うため、意見発表等スムーズに全体交流が行われた。ここから、子供たちに見合った話し合い段階の設定が、活発な交流を生み出すものであると明らかとなった。全体交流終盤に、子供たちに「班員(他者)との話し合いを通して、新たな案(基準)や考え方に会えた人はいますか」と問うたところ、大多数の子供が新たな高校選択の基準案、価値観に出会えた。その際の、風景を図 10 にて示す。



図 10 新たな価値観に出会えた子供たち

以上のように、見付ける段階では、より多くの案や意見、話し合いが活発化するように手だて、工夫を講じた。これにより、多くの個性豊かな高校選択の基準が共有され、複数の基準がうまれた。複数の解決策、方法が示されたことにより、次段階の決める段階において、子供たちは幅広く、自身に見合った意思決定を行うことが可能となると考える。

決める段階では、大方の予想通り、子供たちは自身に見合う高校選択の基準を意思決定していた。若干、抽象的な基準を意思決定した子供、より具体的な基準を複数意思決定した子供も存在した。しかし、これらは今後の高校進学を考えた際の、一基準であり、経過によって修正を加えるものであることを伝え、実践と振り返りを意識させた。第 1 回実践授業の際には、意思決定に悩む子供も存在したが、今回は短時間で自身の意思決定内容を見付けることができていた。ある子供から「色々な意見があったほうが、自分に合うものを見付けやすかった」という声を聞いた。ここから、Gilboa が示した「意思決定とは複数の方法や答えのなかから自身が、自身に見合ったものを判断して決める」というプロセスが妥当であると考えるに至った。

(4) 第 2 回実践授業の成果と課題

本実践授業の一成果としては、「見付ける」段階での子供たちの話し合いの活発化が挙げられる。子供たちの事前に調べてきた案や考えを言いやすい環境、即ち班→全体と話し合い段階を設定したことが効果的であった。これは、子供たちのワークシートの記述から見とることができた。子供たちの実態に則した、教師の話し合いの工夫や手だてが、子供たちの話し合いの充実につながり、個性豊かな意思決定に導くことができると推察した。

一方で、題材等に見合った話し合い段階の工夫を教師が誤れば、第 1 回実践授業のように子ども達

表6 1組(実践群)と3組(協力群)の意識の変容

表〇 実践群・協力群のプログラム実践前後の中学生版キャリア意識尺度の意思決定の因子得点の平均値とSDの分散分析の結果

	実践群			協力群			分散分析結果		
	4月	10月	12月	4月	10月	12月	主効果: 群 (df=1/53)	主効果 (df=2/106)	交互作用 (df=2/106)
意思決定	32.29(6.89)	37.82(8.33)	44.64(6.44)	34.15(6.79)	37.15(7.12)	35.52(6.90)	2.32	48.27**	33.25**

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

の発言が少ない授業となってしまう。第2回実践授業においては、子ども達に見合った話し合い段階を設定できたが、この話し合い段階がどの学校、学級の子供たちにも効果的かと考えれば疑問が残る。学級の子ども達と日頃から親身に関わる担任教師や教科担当者の見とりが大きく授業を左右すると指摘できる。加えて、「授業は生きもの」と例えられるように、ガイダンス授業に関しては、授業者が、授業当日の子供たちの様子や雰囲気を見とり、柔軟に学習過程を変更することも必要となる。その際、教師の柔軟性が求められ、これは教師の資質・能力が試される場面と考える。

5 子供たちの意識の変容

本研究を行うにあたり、子供たちのキャリア意識、特に意思決定に関する意識の変容を、新見(2008)が作成した中学生版キャリア意識尺度調査(6件法)から探った。中学生版キャリア意識尺度調査は、4領域(人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定)の能力・態度を図るものである。本研究では、中学生版キャリア意識尺度調査30項目の質問内容を、子供たちに回答させたうえで、意思決定に関する9項目から、意識の変容を探った。調査は、3回行い実践群1組、協力群3組の比較から読み取った。

中学生版キャリア意識尺度調査を行った時期は、「表1 研究計画及び実施内容」で示した通りである。改めて、その詳細を記載する。

◆中学生版キャリア意識尺度調査実施時期

第1回 キャリア意識調査	平成30年4月18日
⇒ 第1回実践授業実施	平成30年7月10日
第2回 キャリア意識調査	平成30年10月10日
⇒ 第2回実践授業実施	平成30年12月6日
第3回 キャリア意識調査	平成31年12月19日

※第1回実践授業 全学級実践群
第2回実践授業 実践群1・4組(授業実施)
協力群2・3組(調査後実施)

意思決定に関する分析では、調査を実施した3回の時期の子供たちの意識の変容を、実践群1組、協力群3組を抽出して行った結果、表6の通りとなった。それらをグラフとしたものが図11である。

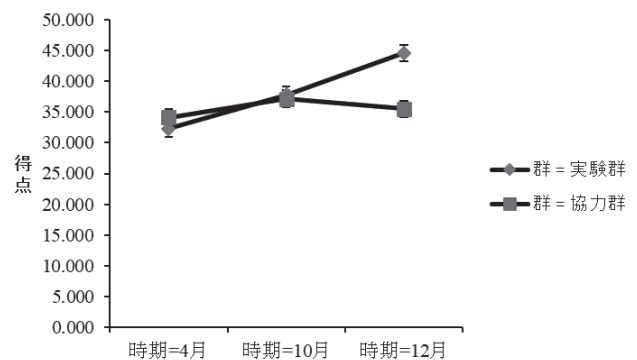


図11 1組(実践群)と3組(協力群)の意思決定意識の変容グラフ

表6、図11から分かるように、4月に実施した調査の意思決定意識よりも、全4学級を対象に行った第1回実践授業後の10月に実施した調査のほうが、1組・3組ともに意思決定意識が向上した。筆者の分析では、第1回実践授業で意思決定の大切さ、人生における重要性を意識した授業を行った効果ではないかと考察している。また、10月期は、第1回実践授業で意思決定した内容の実践を振り返る段階であったため、意識が高かったことが考えられる。

次に、実践群(1組)と協力群(3組)に分けて実施した12月の調査では、グラフを見て分かるように、第2回実践授業を実施した実践群に大きな伸びがあった。一方で協力群は、意識の低下が指摘される。ここから、キャリア教育は、継続的に行わなければ子供たちの意識は持続しないと考え

た。また、意思決定を行う機会の有無も意識調査に影響があったのではないかと考えられる。意思決定以外の3領域に関して、実践群及び協力群の調査結果から、実践群に有意差が出ている。

以上のことから、筆者が実施した実践授業は子供たちの意識変容に効果があったと結論付ける。

6 研究の結果

本研究は、中学校特別活動学級活動(3)の授業において、キャリア教育の継続性を図ること、キャリア形成能力を育むために、その土台である意思決定及び意思決定内容の実践に子供たちを導く学活(3)の授業づくり(「見付ける」・「決める」段階)の工夫が効果的であるか検証することを目的としていた。本研究の結果から、意思決定に導く教師の手だてとして、「見付ける」段階の工夫及び活性化が、「決める」段階に大きく影響していることが明らかとなった。特に、シンキングツールは子供たちの解決方法や意見を可視化することに有効性があるとワークシート分析から判明した。ただし、題材や話合いの場に適したツールを教師が的確に判断する必要がある。また、本実践授業を通して、中学校学習指導要領解説特別活動編に示された、学級活動(2)(3)における学習過程(例)は、小学校特別活動指導資料(国立教育位研究所, 2014)の「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」の学習過程と類似しており、表6のように整理できると考えられる。

表6 学習過程の関係性

	学活(2)(3)の学習過程(例)	小学校指導資料学習過程
事前	①問題の発見・確認	事前活動・課題
授業	②解決方法等の話合い ③解決方法の決定	つかむ
		さぐる
		見付ける
		決める
事後	④決めたことの実践	実行する
	⑤振り返り	ふりかえり

このように、2つの学習過程はすべての項目において、相当する部分が存在する。なかでも、②解決方法等の話合い、③解決方法の決定は、授業

で行われ、「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」の学習過程は、それらと同様の構成である。したがって、学級活動(3)の授業は、小学校特別活動指導資料(国立教育位研究所, 2014)の「つかむ」→「さぐる」→「見付ける」→「決める」の学習過程に準じて行い、話合いの段階設定、シンキングツールの活用等で「見付ける」段階を充実させることで、子ども達を個性豊かな意思決定に導けると結論付ける。

また、中学生版キャリア意識尺度調査の全4領域の結果から、実践群には有意差が出ており、学活(3)の授業(事前・事後活動を含む)では、これらの基礎的・汎用的な能力が養われるのではないかと考える。これらを具現化すると、下記の表7のようになると考えられる。

表7 基礎的・汎用的能力の育成場面

学習段階	基礎的・汎用的能力
事前活動	-
つかむ	-
さぐる	-
見付ける	自身に見合った案や計画を見付ける(より良い意思決定を行う)ために、他者との話合いを通して 人間関係能力 が育まれる。同時に、より多くの意見や考えと出会うことで 情報活用能力 が育まれる。
決める	今後の自身の生活を考えデザインする 将来設計能力 を基に、自身が今後、実践できる内容を意思決定させることで、 意思決定能力 が育まれる。
実行する	意思決定した内容を着実に実践していくうえで自己管理能力(意思決定能力)、自身が見通しや計画を立てることで プランニング能力(将来設計能力) が育まれる。
ふりかえり	実践後のふりかえり段階では、自身を見つめ直す自己理解能力、セルフマネジメント能力、自己管理能力といった 将来設計能力 が育まれる。

表7で示したように、キャリア教育で育む能力・態度の4領域(人間関係形成、情報活用、将来設計、意思決定)は、学活(3)の授業を行うことで強化されるのではないかと指摘ができるものとする。このように、学活(3)の授業は、行うことにより基礎的・汎用的能力の活用を促し、人生におけるキャリアデザインを豊かにすることができると推察する。キャリア教育を小学校から高等学校まで系統性をもって指導し、子供たちに

このサイクルを見に付けさせることにより、これらの能力・態度、4領域の学びは深まると考えられ、キャリア教育を充実させることは有意義であると考えた。

一方で、至るところで述べている通り、中学生段階に見合った②解決方法等の話し合い(「見付ける」段階)の教師の工夫、手だてが今後の授業発展のカギになる。特に学習指導要領では学級全員での話し合いが求められており、「見付ける」段階の学級全体での充実を更に図らなければならないことが2回の実践授業から明らかとなった。

また、子ども達の意味決定したことの実践度合を教師が確認する追跡調査やカウンセリングの充実、発展も今後の課題と言える。

7 おわりに

本研究は、今後、中学校において本格的に実施される学活(3)の授業を、子供たちにとってより充実したものになるようにとの第一執筆者の思いから始まった。本稿をまとめるにあたり、助言や指導を基に執筆を行ったが、記述、要約不足等が散見することと思われる。筆者においては、更なる今後の研究材料とするものであることから、忌憚のないご批評を頂けると幸いである。

主な引用・参考文献

- 堀公俊・加藤彰 2011 ディシジョン・メイキング 賢慮と納得の意味決定述
Itzhak Gilboa 2015 意思決定論入門
国立教育政策研究所 2013 キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書
国立教育政策研究所教育課程研究センター 2014 楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編
文部科学省 2017 中学校学習解説指導要領特別活動編
新見直子 2008 中学生版キャリア意識尺度の開発
柴山伸一 2013 中学校におけるキャリア教育を中心に据えた体験プログラム再構成の試み ～体験活動・体験プログラムの評価を通して～
脇田哲郎 2018 中学校学級活動(3)プランニングシート

謝辞

本研究を行うにあたり、協力して頂いた実践授業協力校の校長先生をはじめ、諸先生方に心からの感謝を申し上げます。

